

# Zora Neale Hurston の *Jonah's Gourd Vine* について

—分裂する identity をめぐって—

前 川 裕 治

Split Identity

A Study of Zora Neale Hurston's *Jonah's Gourd Vine*

Yuji MAEKAWA

## ABSTRACT

Zora Neale Hurston published her first novel, *Jonah's Gourd Vine*, in 1934. What first catches our attention is that the protagonist of this novel, John Buddy Pearson, was born in Notasulga, Alabama. What is said about John in this novel is very similar to Hurston's father's personal history. From this novel, we can conjecture that Hurston was born in Notasulga, not in Eatonville. In addition to this kind of autobiographical aspect, this novel tells us how black people were split in terms of identity. For example, they were split between Northern and Southern values, the white and the black people's ways of thinking, Christian and African or voodoo concepts, etc. They were also dangling between weakness, which is represented by poverty, and strength, which is symbolized by masculinity. What Hurston tries to exemplify is that they have to transcend this split and dichotomized condition.

## 1 はじめに：作品の周辺

1934年出版の Zora Neale Hurston の処女作の *Jonah's Gourd Vine* は、自伝的色彩を強くもった作品である。もともと彼女は自伝的事柄を多く織り込む傾向のある作家であるが、この作品での自伝的面は何らかの意図によって織り込まれていると考えられる。このことは、小論のテーマ背景にもなることであるので、まず作品の自伝的面の確認から始めていき、作品の周辺部分の整理に取り掛かる。

作品の全体的流れは、主人公の John Buddy Pearson が Alabama の Notasulga 周辺を出

発し、Florida の Eatonville に移動して、そこで説教師として名声を上げて行く話である。この軌跡は Hurston の父母の軌跡と同じである。John という名前は、Hurston の父と同名である。John が大柄で白人と見間違えられるくらい白い膚をしていること、Eatonville に来てから大工をしたり、説教師をすること、また、女遊びがひどく、妻の Lucy を困らせたことも、Lucy の死後まもなくモラルに欠ける女性と再婚し、子供達がみな家を出てしまうことも、最後交通事故で死亡することも、Hurston の父と一致する。母の Lucy の結婚前の名前は Potts で知的な人であったこと、小柄であったこと、死亡するとき娘の Zora に死を迎える儀式をしないでくれと頼むことも、Zora の自伝と一致する。以上のような作品の自伝的傾向からして、彼女は *Jonah's* で家族を含めた自分の歴史に眼をやろうとしていたと言って良いように思える。

作品が出来るまでのプロセスを見てみると、同じようなことが言える。1926年に“Sweat”という短編を *Fire!!* に掲載して、約7年間小説らしいものを書いていない。そして1933年に“The Gilded Six-Bits”を *Story* に掲載している。そして1934年に *Jonah's* の出版となっている。これは前作の“The Gilded”の出来具合に感心した Lippincott 社の編集の一人が Hurston に長編を書いてみるように薦めたのがきっかけのようである (Hurston: 1942, 209)。作品のタイトルは最初は *Big Nigger* にするつもりだったが<sup>1)</sup>、結局今のタイトルになったようだ。構想そのものは1929年にある程度出来ていたようだが (Witcover, 86)、本格的に書き始めてからは3カ月で、Florida の Sanford という所で書き上げたということだ<sup>2)</sup>。自伝的面で謎を意図的に造り出す傾向のある Hurston であるが、*The Sanctified Church* の中にある説教が、実際にあった説教として収録されていて、その年代が1929年となっていて、これと全く同じ説教を作品中 John が行っていることからしても、1929年ころ構想があったということは間違いないようだ。1933年9月6日に書き上げた原稿に関して、Hurston は悲観的予測をしていたが、タイプを頼んだ町の Judge Wilkinson の秘書の Mildred Knight は売れると言って、喜んでタイプをしてくれたということだ (Hurston: 1942, 210)。そしてこの時期彼女は非常に貧しく、郵送料も借金して、1933年10月3日に郵送し、10月16日に原稿を受け取るという電報を Lippincott から貰っている (Hurston: 1942, 210-211)。

ここで大切なことは、1935年に出した *folklore* を集めた、言わば、作品集の *Mules and Men* が、1932年の5月に既に完成していたということである (Hurston: 1942, 208-209)。この作品は1927年から始めた南部での *folklore* 収集の旅の成果だった。この旅と言い、*Mules and Men* の1932年完成と言い、Hurston の南部、即ち、自分の育った環境、文化、社会への興味がいかに高かったかを物語っている。

このような面が *Jonah's* を書く時の base になっていることは確かである。このことを最も

象徴的に物語っていることは、*Jonah's* に Bob Wunch への献辞が掲げられていることだ。彼が、Hurston の “The Gilded” 出版に努力してくれた人で恩義を感じていたということもあろうが、当時南部黒人民衆文化を表現することで黒人たちをリードしていた一人でもあったということが Hurston と Wunch とをつないでいる。彼の考えるこの面と、Hurston の考える南部民衆の志向が一致していたからこそ、Hurston は *Jonah's* で Wunch に献辞をしているのである。

*Jonah's* に関する批評はまだ多くない<sup>3)</sup>。その中でも肯定的評価と否定的評価に明確に分かれる。肯定的評価としては、*Jonah's* の1991年の Perennial 版の “Foreword” を書いた Dove で、全体的に良くできた作品として、“remarkable achievement” (Dove, xiv) と一級の褒め言葉を使っている。Howard も best ではないが褒めて良い作品とし、Hemenway や Darwin Turner が言うほど悪くないと擁護する態度を取っている (Howard, 91-92)。Speisman も Hemenway の構造的・人物的発展がないという否定的見解に対して、John が voodoo 教を信じるようになる点で発展があるとして、発展性のある作品としている (Speisman, 88)。言語の使い方については、概して好評で、民衆語を芸術にまで高めているとして評価を与えている批評家が多い<sup>4)</sup>。

否定的評価として代表的なものは、Hurston の伝記を書いた Hemenway で、全体的に作品が未成熟だと言っている (200-201)。具体的には、構成面で “not well integrated” という指摘を Brawley (11) が行っているし、Young は “a lack of plot and faulty structure” (220) を欠点として挙げている。更に、Hemenway はアフリカ性と全体とのつながりがスムーズに行われていないという指摘を行っている (199)。また Bone (127) や Ford (242) は人物描写面で vision がないと言っている。これに加えて、上記の肯定的面の一つの言語面で、民衆語を使い過ぎると言い、これを否定的に捕らえている批評家もいる (Neal, 25)。

今まで肯定的面と否定的面の批評の紹介を簡単に行ってきたが、概して、肯定的評価ほど新しく、否定的評価ほど古い時期に行われている。これは Hurston に対する再評価に伴って出て来た評価の傾向かも知れない。しかし、*Jonah's* への評価はまだ定まったと言えるところまで達していないのが現状だ。

## 2 黒人教会とキリスト教

前章で見たように、自伝的内容を軸に展開するこの作品は、主人公の John の説教師としての仕事、作品を理解する上で重要な役割をなして来る。Hurston は James Weldon Johnson への手紙の中で次のように説教師に関する興味を述べている。

Just a word about my novel .... I have tried to present a Negro preacher who is neither funny nor an imitation Puritan ram-rod in parts. Just the human being and poet that he must be to succeed in a Negro pulpit. I do not speak of those among us who have been tampered with and consequently have gone Presbyterian or Episcopal. I mean the common run of us who love magnificence, beauty, poetry and color so much that there can never be too much of it. Who do not feel that the ridiculous has been achieved when someone decorates a decoration. That is my viewpoint. I see a preacher as a man outside of his pulpit and so far as I am concerned he should be free to follow his bent as other men. He becomes the voice of the spirit when he ascends the rostrum. (Hurston: Letter to J. W. Johnson, 1934)

この Johnson への手紙は *Jonah's* を書いた後、Zora Neale Hurston のこの作品への意図が何であったかを語ったものである。これから、彼女の興味がプロテスタントに染まっていない、黒人文化を受け継ぎ実践している、人間臭い説教師にあった事が分かる。また、彼女の作品執筆の重要な狙いとして、説教師を軸にして、キリスト教的概念と伝統的黒人文化をベースにした概念とのかかわりにあったことも分かる。主人公 John の説教師としての仕事を念頭においても、こういうことが作品の全体の彩りの基調になっていると思える。まず、この章では、黒人教会とキリスト教との関係を分析する。

Hurston が黒人教会に興味を抱ききっかけの一つは、黒人教会の内部対立にあるようだ。内部対立に接する中で、黒人教会のあるべき姿について思いを巡らしたのだろう。*Mule Bone* に描かれていることからして、Eatonville には Macedonia Baptist Church があり、そこで Clarke 派と Simms 派に別れて、いわゆる、権力抗争を行っていたようだ。これと良く似た争いが、作品中でも John が説教師を務める Zion Hope 教会で起こっている。John が教会の会衆からまだ信頼されている間は、特に問題は起きなかったが、彼への不信が高まるにつれて、“Hattie faction” と “Hambo and John Pearson faction” (264)に分かれて争いを演じる。この争いは両派の思惑のみが絡んだ形で行われる。こういう中で、教会の在り方について彼女は考えさせられたのだと思える。

彼女は自伝的作品の *Dust Tracks on a Road* の中で、Macedonia Baptist Church がいかに自分の一部になっていたかを説明している。

...I had been pitched head-foremost into the Baptist church when I was born. I had heard the singing, the preaching and the prayers. They were a part of me. But on

the concert stage, I was always heard songs called spirituals sung and applauded as Negro music, and I wondered what would happen if a white audience ever heard a real spiritual. To me, what the Negroes did in Macedonia Baptist church was finer than anything that any trained composer had done to the folk-songs. (Hurston: 1942, 206-207)

これから Macedonia Baptist Church が Hurston とする人間を形造るのにいかに重要な役割をなしていたかということと、その教会が白人的なものといかに掛け離れたものであったかということが分かる。

黒人教会の基盤は本来、アフリカのなもので、キリスト教的な要素はなかったようである。W.E.B.DuBois は黒人教会が本来的に持っているアフリカ性について次のように言う。

First, we must realize that no such institution as the Negro church could rear itself without definite historical foundations. These foundations we can find if we remember that the social history of the Negro did not start in America.... His religion was nature-worship, with profound belief in invisible surrounding influences, good and bad, and his worship was through incantation and sacrifice. (DuBois, 341)

更に DuBois は黒人教会のアメリカに於ける役割として「黒人生活の社会的中心」(DuBois, 340) と言い、教会が日常的に黒人生活を支えていたこと、物事の判断をする時の最終的より所であったことを証言している。

アフリカ性を受け継いだ黒人教会に於ける説教師は、当然のこととして、アフリカの性格を持った人達であった。説教師がどのような性格で、どのようにして生まれて来たかについて、もう一度 DuBois の証言が必要である。

He [Priest or Medicine-man] early appeared on the plantation and found his function as the healer of the sick, the interpreter of the Unknown, the comforter of the sorrowing, the supernatural avenger of wrong, and the one who rudely but picturesquely expressed the longing, disappointment, and resentment of a stolen and oppressed people. Thus, as bard, physician, judge, and priest, within the narrow limits allowed by the slave system, rose the Negro preacher, and under him the first Afro-American institution, the Negro church. (DuBois, 342)

説教師がいかにアフリカ性を持った存在であったか、また、そういう性格が民衆の心をいかに支えていたか、それに、いかにユニークな全人的な人物であったかが分かる。

作品中でも、会衆の信頼を得ていた John は、説教の中でも何度か説教師と会衆との心の一致が必要であるかということを訴えている。会衆と離れた説教師はあり得ないのである。しかもその説教師と会衆との一体化は、黒人の歴史や文化に根差した説教をするからこそ成立するのである。白人的方法で説教を行う説教師に会衆は決して反応することはないのである。

The real, singing Negro derides the Negro who adopts the white man's religious ways in the same manner. They say of that type of preacher, "Why he dont preach at all. He just lectures." (Hurstons: 1981, 107)

作品の中でも、Cozy という説教師が John に代わって Zion Hope 教会で説教をしたときの会衆の反応は、芳しくなく、上記の引用のように "just lectures" と同じ表現で、不満と戸惑いを表している。

以上見て来たように、歴史的・文化的要素を持った黒人教会、その中で黒人の歴史と文化を実践する黒人説教師は黒人生活の中で極めて求心的役割を果たして来たと言える。しかし、これも時代の流れの中で、変わって来ているようである。主人公の John はその変化について次のように言っている。

".... Don't it look funny, dat all mah ole pleasures done got tuh be new sins? Maybe iss 'cause Ahm gittin' old. Havin' women didn't uster be no sin. Jus' got sinful since Ah got ole." (262-263)

会衆の説教師に対する態度や説教師の行動に対する捕らえ方が昔と変わって来ていることに John は気付いているようである。

このような変化を引き起こしている要因は西欧的概念の支えであるキリスト教的文化にあると Hurstons は考えている。彼女は黒人教会の一つである sanctified church にそのような傾向が見られると、次のように言っている。

They [songs] are twisted in concert from their barbaric rhythms into Gregorian chants and apocryphal appendages to Bach and Brahms. But go into the church and see the priest before the altar chanting his barbaric thunder-poem before the altar

with the audience behaving something like a Greek chorus in that they “pick him up” on every telling point and emphasize it. (Hurston: 1981, 103-104)

歴史的に日常生活の支えとなり、先祖の血を受け継ぎ、それを実践して来た黒人教会がキリスト教化して行く中で、何をもたらしたかという点、DuBois によると、墮落と家庭崩壊だと言う。それに加えて、キリスト教化した黒人教会は、黒人たちに無抵抗と服従を教えたと言う (DuBois, 344)。こういう中で、説教師に対する会衆の捕らえ方も、以前の全人的な人物としてではなく、他の職業と同じように、一つの社会における地位となり、人々の尊敬を得ることが出来るという点で、成功者の一人として捕らえられるようになって行く。こうなると説教師や黒人教会は従来の文化や歴史を伝える、黒人の生活を精神的に支える存在から、人々の中に上下関係というカースト制度意識を助長し、固定化していく為の役割に変貌してしまうのである。

時代の流れの中で、黒人生活の中心であった教会と説教師及びそれを取り巻く黒人たちの変化によって、黒人文化そのものに揺れが生じ、黒人達自身の中で identity の分裂を引き起こすことになっている。本来支えであったものが、人種の意味での分裂の危機を引き起こす要因になっているのである。

### 3 社会の分裂

黒人教会で見られた分裂は、基本的にはアメリカ黒人の分裂の宿命を象徴している。歴史的に見て、彼らは分裂の歴史を繰り返して来たと言っても過言ではない。この章では、黒人教会よりも更に範囲を広げて、分裂を繰り返して来た彼らの歴史と、その分裂が民衆の間に表れている具体的状況を見て行きながら、それを支える二律背反の意識構造について分析を行う。

アメリカ黒人の歴史的・代表的指導者というと、Booker T. Washington と W. E. B. DuBois である。この二人は共に偉大な指導者として良く引き合いに出されるが、同時に、対照的な理念の基に民衆を指導したことで有名である。二人とも *Jonah's* には簡単な記述があり、Hurston の中にもこの二人の持つ対照的な指導理念が、作品を書くときの心の背景の一部として存在していたように思える。

Booker T. Washington は作品の背景の一部でもある Alabama の Notasulga の南西約10マイルの Tuskegee で1881年に Tuskegee Institute という黒人の為の、いわゆる職業学校を始めている。彼の開校、学校維持の苦勞は *Up from Slavery* に詳しい。こういう中で彼が目指したことは、簡単な言い方をすると、黒人は自立するために、手に技術を付け、少しでも白人に

近づく為に努力するという事だった。いわゆる実用的教育を目指したのである。作品に出て来る Notasulga の学校は Washington のものかどうかは不明だが、Washington の学校を意識したものだったことを想像することは容易である。

W.E.B.DuBois は、Washington とは対照的に、黒人が苦境から脱出するには、独自の黒人文化が何であるかを知り、それに自信を持つことを指導の理念とした。白人的文化の追求でなく、歴史的に受け継がれて来た黒人の魂に目覚めて生きることこそ黒人の真の救済の道があると考えたのである。彼のこの考えは、1903年出版の *The Souls of Black Folk* に凝縮されている。一見民族主義的響きのある彼の考え方も、人種差別の中で否定され、自らも否定する可能性のあった黒人性の回復を訴えた点では、Washington とは好対照であった。彼のこの考え方は1905年に始まった「ナイアガラ運動」の中で一層深まり、理解を広めて行く。

短絡的図式化には危険を伴うが、Washington は白人同化的方法で、まず黒人の厳しい現状を脱出することを主張したのに対して、DuBois は Black Nationalism 的考え方で、失われた黒人の自負心を呼び起こすことを目指したと言える。当時、時代は Washington 寄りの傾向が強かったと言える。それは、奴隷解放直後で、制度は変わっても人種差別意識が白人の中でも黒人の中でも、頑強に存在していたからである。人種差別の中で、白人は遥かに黒人より優れた存在として捕らえられていたこと、黒人たちもそれと同じように考えていたことは想像に難くない。このため、Washington は白人側からの扱いも良く、1898年にはマッキンレー大統領、1905年にはルーズヴェルト大統領の Tuskegee Institute 訪問を受けているし、White House にも招待を受けた事があった程だ。それだけ Washington 的方法が白人の社会からも歓迎されていた事が分かる。

1910年には黒人の北部への大移動、いわゆる“the Great Migration”が起きている。作品の後半部分にもこの北部への黒人移動が人口問題を引き起こして、労働人口が激減していたり、教会の会衆が減少したりして、いわゆる南部の存亡の危機にすら成り得る状況だったことが分かる。1914年になると、第1次世界大戦が始まり、北部では工業労働力が益々必要になって来る。そして、1920年には黒人の北部移動はピークに達する。猿谷によると、1910～20年代の北部での黒人人口増加率は43.3%であったのに対して、南部では1.9%で、1920～30年代は北部では63.9%と一層増加し、南部では5.0%に止どまっている(猿谷, 149)。

黒人の北部への眼は20世紀に始まったことではなく、奴隷制時代から存在していた。南部プランテーションで展開された奴隷制の時代、北部に行くとも自由になれるという噂が多く、黒人を北部に向かわせた。彼らは奴隷時代も解放後の時代も北部を一種の Canaan という“the land of promise”(239)として捕らえていたのである。奴隷時代は肉体的自由を求めての北部移動だったが、解放後の彼らの動機には別の角度からの強い動機が加味されていったと言え



る。それは、一言で言うと、物質的豊かさ、都会的華やかさへの憧れである。作品中人々が次々と北部に移動して行くのも、世の中が金にとりつかれて来ているからだと言っている。

World gone money mad. The pinch of war gone, people must spend. Buy and forget. Spend and solace. Silks for sorrows. Jewels to bring back joy. The factories roared and cried, "Hands!" and in the haste and press white hands became scarce. Scarce and dear. Hands? Who cares about the color of hands? We need hands and muscle. The South—land of muscled hands. (235)

こう言った北部への黒人の移動によって起きて来る黒人文化的開花が *Harlem Renaissance* と言われる文化運動である。*Harlem Renaissance* の時期は議論の分かれる所だが、一応1920年前後に始まり、約10年間ハーレムを中心に起きた文化的開花だと規定出来る。*Jonah's* は Bone の言うように「ニグロ・ルネッサンスによって培われた」(Bone, 127) 作品であると言われている。*Harlem Renaissance* の解釈も議論の分かれる所だが、特殊な要素はあるにしても、同時代に起きた *Chicago Renaissance* と同じ考え方で捕らえるべきであろう。*Chicago Renaissance* は国内が戦争景気で沸く中で、社会が物質化・工業化して行き、人間が機械に振り回される傾向が強まり、人間性が社会から失われて行くことへの反動であった。これと同じ方向から *Harlem Renaissance* をとらえるべきだと思う。戦争により時代の非人間化、社会の殺伐化に対して、黒人文化はその当時の人々の心の痛みを癒す為の役割を果たしていたと言って良い。人々の心の荒廃化を引き起こしている強い要素になっているものを、西欧的文明の中に認めて行く傾向にあった *anti-culture* 的考え方を持った人達は、白人とは異なる文化の黒人文化を、エキゾチックな文化として歓迎していた。そのため、黒人文化のエキゾチック性が強調され過ぎる面があった。黒人文化そのものはエキゾチックでも何でもなく、エキゾチックという見方をすること自体、*Harlem Renaissance* が黒人の文化開花と言いながら、白人的視点からのものであったことを物語っている。黒人文化は、本来民衆性を基盤にしたところから成立していながら、エキゾチックということで、価値を与えられた為に、民衆的傾向故に低俗的とらえ方をされ、エキゾチックという価値を失うことを恐れて、民衆から離れたところで展開されることになる。こういったことは、*Harlem Renaissance* が白人的傾斜をもった文化運動だったことを如実に示している。

次にこう言った白人的基準を造っていった背景、それに伴う黒人たちの中に生まれて来た意識構造を作品に即して見て行くことにする。既述したように、黒人の白人化傾向を考える際、時代的背景は極めて重要な要素である。それは、黒人たちの白人化傾向が奴隷制や *sharecrop-*

ping system)の中で、自己否定的認識を基盤に白人崇拜というパターンを取っているからである。

*Jonah's*の中には登場人物の chronological な面で不明確な部分が少しあるが、主人公 John の母に当たる Amy の生まれは1853年だと分かる。夫の Ned は Amy より年上と思えるので、1850年前後の生まれだと想像出来る。即ち、彼らは奴隷として生を受けたという設定がなされていて、少なくとも、1863年の奴隷解放宣言まで約10年間奴隷として生活を営んでいたのである。作品では彼らの解放後の生活から描かれていて、白人の Beasley の下で、sharecropper として生活している。sharecropping system は、黒人に自由を与えた制度のように見えて、実は彼らの生活を奴隷制時代以上に苦汁に満ちたものにして行った。Ned の家族の生活は日に日に厳しさを増し、そのため人間としての尊厳を失って行く。それに並行して、機関車によって示されているように、白人の優越性に (Eley, 324) 隷属する意識を強めて行ったと言える。

奴隷及び sharecropper を共に経験する中で、自己に対する否定意識を強め、白人への劣等感を高めて行った Ned の内的苦しみは、彼が年令より年寄りに見える外見に象徴されている。彼に内在する複雑な白人への ambivalence は、義理の息子の混血児の John に対する歪んだ態度となって表れる。John は既述したように、白人と見間違えられる位白い膚をしている。この白さに対して Ned は敏感に反応するのである。彼は John をかつては愛していたが、徐々に憎しみを強めて行く。この変化は、彼の sharecropper としての無力感に並行するものである。John に対する Ned の ambivalence は一見別々の感情に見えるが、白人に対する彼の感情ということを軸に考えると、同じ意識構造から発していることが分かる。即ち、共に彼の中に黒人である自分に対する否定意識と白人に対する劣等意識がベースになっているのである。John を愛する時の彼の中には、自分の身内に白い膚の人間がいて、それを自分が養っているという歪んだ形の優越感、即ち、「白」に対する劣等感がある。John に憎しみを表すことを憚らない彼の中では、自分の今の厳しい状況を造り出した元凶の「白」の世界を、John の白い膚によって想起させられ、彼に一層の無力感を抱かせるということが潜在的に生じているのである。しかも、John に自分の支配力を行使することで、歪んだ形での優越感、即ち、「白」に対する劣等感を感じているのである。奴隷制度と sharecropping system の中から生まれた Ned の “a sense of powerlessness” (Witcover, 88) は、彼の中で歪んだ形で白人志向を形造っているのである。

“John is de house-nigger. Ole Marsa always kep’ de yaller niggers in de house and give ’em uh job totin’ siver dishes and goblets tuh de table. Us black niggers is de ones s’posed tuh ketch de wind and de weather.” (14-15)

いわゆる人種差別の中で生まれた劣等意識を克服するには、その劣等意識を根絶する必要があるが、Ned の場合は、Amy が “Monkey see, monkey do” (24) と Ned の行動を形容するように、白人的行動を取ることで、劣等意識を越えようとした。白人的になろうとすることがどのような形態を取って表れているのか、また、その行動の裏にどのような意識構造が存在したのかについて次に見て行く。そして黒人の中に形造られて行った白人的基準に偏った形での内的分裂について考えて行く。

Ned は黒人同胞について次のように言っている。

“... de brother in black don't fret tuh death. White man fret and worry and kill hisself. Colored folks fret uh lil' while and gwan tuh sleep...” (25)

彼の白人寄りの発想が読み取れるが、それを黒人同胞を否定する事によって実践しようとしている事が分かる。頭が鈍いとか、思考能力がないと言った見方は、白人による人種差別で黒人を否定するときの根拠になる場合が多いが、これと同じ基準を使うことで、黒人を否定している事が分かる。Ned のこの傾向が Lucy の母の Emmeline の中にもある。自らを上流黒人として認識し、他の Lucy の友達の黒人は “loose” (114) であると考えている。彼女の中に、自分は豊かで立派な家に住んでいるのに対して、彼らは白人の地所に住む “quarter niggers” に過ぎないという、物的豊かさを基にした判断基準があり、自分の白人的近さを是として捕らえているのである。彼女のこの考え方に基づく行動や、Lucy にしとやかで過度に道徳的行動を要求する点などから、南部の白人貴族的生活様式に近いものを彼女が求めていたと言える。

劣等感を生み出して行く基になるものの中に物質的志向がある。これは奴隷制時代に蒔かれ、sharecropping system の中で増殖された黒人の中の経済的弱さと関係する。いくら働いても自分のものを持つことが出来ない生活の中で、経済的不能感を黒人たちは高めていき、それに対する反動として所有欲を強めて行く。このことは Ned が地主の Beasley に cotton share を騙し取られている事を見ても分かるし、Emmeline が娘の Lucy の結婚相手に Artie Mimms という年を取っているが、60エーカーの土地持ちの男を考えていて、John のような何の財産も持っていない男を否定しようという事にも表れている<sup>5)</sup>。こういう物に対する所有志向は、Ned の中にある女や子供を所有しているという意識にも通じる。これは奴隷時代、奴隷主が奴隷を自分の財産として所有していた時の意識と同じものなのである。そういう中で生きて来た奴隷経験者である Ned の中には、物を所有したいという意識と同じ意味で Amy や自分の子供達を、物として、所有しようとする意識が潜在的に養われてきていたのである。

こう言った所有欲は、同じく奴隷制時代に、正当なものとして黒人たちの間に染み込んだ、支配者を絶対とする意識につながって来る。服従する側に立っていた Ned は、Amy や子供達を服従させる事によって自己満足を得ようとする。彼の心の中では、弱いものが更に弱いものを求めて強者たらんとする、いわゆる弱肉強肉の論理が働いているのである。sharecropper である為、家庭内で経済的主役を演じられなくなっていた彼は、一家の柱になれないという状況にあり、夫として、父として、即ち、「男」としての喪失感を強めて行ったのである。こう言った Ned には、失われかけた「男」を守る為に、義理の息子の John に敵しくあたる必要があるのだ。John は子供である為に弱い存在で、Ned の「男」回復の為の手段としてのターゲットになり得るということもある。更に、Ned の狙いを効果的にすることは、John が「白人的」という、いわゆる強さを持っていることに加えて、肉体的にも Ned に勝る程成長していて、彼を虐待することで、Ned が「男」を回復出来る可能性が強まるのである。「男」を誇示することで、「主人」であり続けようとする彼の狙いは、Amy に向けられる鞭という奴隷制時代を想起させる道具によっても強められている。

支配者側に立とうとする意欲は Ned に限った事ではない。Sanford の教会関係者も支配者である白人側に立つことで自己満足を得ようとする傾向がある。既述したように、白人的基準の中で社会的に尊敬される地位という価値を付与されていた説教師側に立つことを、会衆たちは一度は試みる。即ち、女遊びが激しい John の悪い噂が広まっていながら、説教師としての地位を保持している彼への会衆からの支持は維持される。説教師を尊敬されるべき地位として固定化して捕らえるようになっていた会衆は、その地位にいるからこそ John の Hattie に対する暴力も許す事が出来る。それは Hattie という whore を殴るという、whore を否定する暴力を是認する事で、尊敬されるべき地位として固定化され、ステレオタイプ化された説教師を支持することになるからである。これに対して、白人による裁判を通して、結果的に説教師を失職すると、彼らの John に対する態度は豹変するし、彼に対する尊敬の気持ちを全く捨て去ってしまうのである。

以上のことから、かつて奴隷制度や sharecropping system の中で傷を深めて行った劣等意識に支配されていた黒人たちの中で、彼ら自身に対する評価が、彼らの持っている本来的人間性に基いて行われるのではなく、彼らの外見的な、付加的価値によって行われていた事が分かる。その外見の判断をする時の基準が自己を否定する形で、白人的基準を絶対とする固定観念として形造られていっていたのである。ここで大切なことは、彼らの中に、一方を否定し、他方を肯定するという形で彼らの固定観念が強化されていた事である。即ち、彼らの中の自己否定的意識と白人的基準に偏った志向は、相互依存的に存在していたと言えるのである。別の言い方をすると、彼らの中に、二律背反の意識構造があったという事である。このため、具体

的に言うと、彼らの中ではいつも、キリスト教的概念とアフリカの又は voodoo 的概念とか、聖人志向対悪人的傾向とか、聖女を求める志向に対して *whore* を求める志向という形で、二つの相反する傾向が共時的に、お互いを必要としながら並在していたのである。しかし、彼らのこの二律背反の出発は、劣等感という自己を否定するところにあった為、究極的には、彼ら自身の足元を揺るがしかねない状況にあったのである。こういう自滅的可能性を秘めた状況に彼らはあったと言える。

#### 4 John の分裂

前章では奴隷制度や *sharecropping system* の中で育った白人的基準の中で、自己否定的傾向を強めながら、白人寄りの認識の傾向を強めて行った黒人大衆を、歴史的面と、作品面の両面から見て来た。この章では、作品の主人公 John を対象として、Lucy を中心にする女性たちと彼との関わりの中で、John の中の *identity* の分裂を見て行く。論の展開の軸になることは、彼の中にも基本的に二律背反的意識構造が存在し、*identity* 分裂の危機にあったという事である。

John に内在する意識構造を考える際の出発点は義理の父 Ned との関係である。彼の本当の父は白人の Alf Pearson らしいという暗示はあるが、真偽の程は定かでない。父が明らかでないということで、彼の中では象徴的な形で、男性性が剥奪された状況が造り出されている。これに加えて、Ned からは “yellow, gold bastard” (22) と言われ、彼の息子として、即ち、男として、認められないという環境に置かれている。こういう彼の出生の不安定さが、彼の男性性の不安定さを造りだし、彼に “sexual urge” (Schmidt, 116) を造り出している。この為、彼は生まれた時から一人前の男として自分を証明しなければならない状況にあったのである。

彼の男らしさを求めることに集約される人生のスタートは、肉体的に Ned に反発することから始まる。一回は母に鞭を振るう父に対して、母を守るために Ned に反発し、もう一回は畑で Ned の命令に従わなかったことで殴られそうになった時、毒ついて、彼の暴力を押さえ付ける時である。彼は自分の男としての存在を否定していた Ned に反発することによって、皮肉にも男になる手段を与えられるのである (Brown, 79)。そして作品では、彼のこの男としての *identity* の確保の為の行動のイメージが最後まで続く。

作品の全体の流れを John に絞って考えて見ると、彼が貧困から金持ちへと、仕事の面では *sharecropper* から説教師へと、成功して行くことを軸としてストーリーは展開される。この展開の中で彼の意識は、劣等感から優越感へと変わって行き、男性性を認識して行くという流れを持っている。しかし、この成功への道程で、彼の内面に変化が生じて来ることがこの作品

のポイントになる。

John は義父 Ned との確執の中で自分の中にある男として認められない事から生じる劣等意識を顕在化させてはいなかったが、貧しい Ned の家を出て、Songahachee 川を渡ったところから、それは彼の意識の表面に出て来る。彼がたどり着いた川の向こう側の世界は、今までの赤貧の世界に比べて、華やかで豊かな世界だった。そのときの彼は裸足で、着ているものもみすぼらしかった。“He felt ashamed of his bare feet for the first time in his life.” (31) とあるように、彼はそこで劣等感を抱くと同時に、それを越える為の行動を開始する。そのような新たに認識された劣等感と上昇志向は、Lucy との関係で確認出来る。Lucy は、総ての点で彼より勝っていた。外見的にも身綺麗で、知識もあり、豊かな家庭の子供であったのだ。それに対して、彼は「金も地位」(159)もなく、彼女を眼の前にして、劣等意識を増長させるだけだった。そういう彼女をものにするからこそ、彼の劣等感を克服し、成功感を味わい、男としての存在感である masculinity を得る道であったのだ。以上のことを更に詳しく見て行くために、Lucy を巡って彼がどのような角度から masculinity を追及して行ったかをたどってみる。

John は両親の下を去るとき、“wants tuh make money” (26) と母に言って家を出て行く。彼のこの言葉は、金儲けが今後の人生の目的の一つであることを示している。即ち、出発に際して、彼の目指したことは、物質的豊かさを求める事であったのだ。彼の物質的豊かさへの志向に内在している歴史的意味は、既述したように、racism による経済的搾取の中で、経済的基盤を失って行ったことによって、家族を養っていけないという、一家の大黒柱であるべき者にとっての無力感から生じる反動なのである。彼の中には、潜在的に、物質的に豊かになる事で、家族を支えることが出来るようになり、それに伴って、男としての満足感を得ることが出来るという意識が潜在していたのだ。John の中に潜在する、こう言った形での黒人男性の歴史的含みをもった masculinity 志向は、Lucy との結婚に母 Emmeline が反対するが故に、彼の中では反動的に強まる。またそれは、“Good times, good money, and no mules and cottons” (167) であるフロリダに行くときの彼の物質への強い興味によっても確認される。更に、このことは、作品に「ヨナ書」のイメージをもたせてあることでも示される。「ヨナ書」のヨナは神の命に背いてタルシシュに向かう。「タルシシュとは...有名な鉱山があり、商業活動も盛んな町だった。タルシシュとは...豊かな富と結びついた町だった。...神の前を逃れたヨナは、そこで一旗あげて富と幸福を手に入れようと考えていたのであろう」(宮田, 28) とある。ヨナの考え得るタルシシュへの期待が、物欲的幸福であったように、John の Florida の Eatonville への期待も物質的豊かさにあったのである。

貧困の世界から川を渡って豊かな世界で出会った Lucy は、John と比べると肉体的面を除

いて、総ての面で勝っていた。最初に彼女を見掛けた時から心を魅かれた彼にとって、彼女に勝つには、肉体的強さを示すこと以外他になかった。彼は走ることも他の生徒と比べて早いという彼女と競争して勝利しようとする。更に、彼は自分の肉体的強さを誇示する為に彼女を抱えて川を渡って見せるのである。そのとき、彼は次のように言っている。

“... Lemme tote you 'cross den. Ah kin place it back for de other folks .... Ah kin tote uh sack uh feed-meal and dat's twice big ez you. Lemme tote yuh. Ah 'clare Ah won't drop yuh, ... Little ez *you[sic]* is nobody wouldn't keer how fur he hafta tote you. You ain't even uh handful. (68-69)

彼の中に力強さで Lucy に勝利しようとする気持ちがあったことが表れている。John のこの気持ちは、このときみんなに怖がられている、川に住む蛇を殺す行為によって、一層明確に示される。蛇は Hurston が masculinity との関連で “Sweat” という短編でも使っているものだが、*Jonah's* でも様々な形で蛇をイメージさせるものが描かれている (Howard, 84-85)<sup>6</sup>。

蛇は “a phallic image” (Schmidt, 119) である為、その蛇を殺すことによって、 “display his male strength” (Schmidt, 119) することが出来るのである。だから蛇は masculinity への “temptation” (Morris, 7) としての役割を果たしていると言える。John の肉体的強さへの志向は、このように Lucy との出会いに始まり、Florida への途中で立ち寄る男の世界である tie-camp や、Florida 到着時に行う railroad-camp での仕事の中で強められて行き、自らの masculinity 願望を高めて行く。

Alf Pearson の農場に行くまで、John は読み書きが出来なかった。知的面でも彼は Lucy に数段劣っていたと言える。Alf の好意で学校に通う John は読み書きへの意欲を示し、進歩も著しかったが、言葉の使い方という面では Lucy を凌ぐことは出来なかった。結婚後も、彼女が知的面で John に勝っているということは、時々行方彼女の助言の有効性によって示されている。潜在的に masculinity 確保願望のある彼は、Lucy の知的面にも勝る必要があった。そのことは、彼女の言葉を封じる事によって実践される。その一つの方法が言葉の使用範囲を制限することであった。

In contrast to John's vividly metaphorical and public preaching, Lucy's talk, rich in wit and aphorism, is overheard in the home, only children respond to its imperatives. His words earn money, status, and respect. Hers evoke his silence and enmity. (Wall, 11)

John の言葉が対外的価値をもっているのに対し、Lucy の言葉は家庭内に限定されたものになっているという指摘を Wall はしているのである。彼女の言葉が徐々に力を失って行くことは、更に、彼女の使う言葉が完結しないで終わる場面が描かれる事によって示されている (Schmidt, 124)。そして、John が説教師という話術を最も大切とする仕事で名声と信頼を得るに至り、彼は Lucy から言葉を奪うのである。

“Oh you always got uh mouf full uh opinions, but Ah don’t need you no mo’ nor nothin you got tuh say, Ahm un man grown. Don’t need no guardzeen atall. So shet yo’ mouf wid me.” (204)

このようにして、Lucy と John の立場は逆転し、彼の言葉の使い方から見て、知的な面で Lucy に勝る事が出来、masculinity を獲得出来たと自己満足を抱くのである。

今まで Lucy との関係で見て来たように、John の中には相手より上位に立つことで masculinity を実感しようとするところがあったことが分かる。このことは、Lucy との関係では、自分が Lucy の “father and mother” (131) の役を果たすと彼女に約束する時の言葉に象徴されている。彼女との関係で対等の関係を彼は目指したのではなく、上下の関係を造り出し、それを維持することで、二人の関係を成立させようとしていたのである。彼のこういう考え方の出発点は、最初の貧しい生活にある。貧しさの中から豊かさを実現する為には、地位が上になることが必要なのである。この上昇願望は、Alf の農場で信頼を得て、“foreman” (114) としての役を与えられることに始まる。Eatonville に行った後は、彼のこの上昇願望は更に強化され、pastor, major, moderator と上昇していく。こうして地位をあげる事で、彼は自らへの masculinity 意識を強めて行ったのである。

以上見て来たように、基本的には彼の masculinity を造り出している源は、彼自身が貧しかったという所にある事が分かる。貧しさ故に彼には弱者意識、劣等意識が、masculinity 願望と裏腹の関係で存在していた。彼の中では、そういう貧しさに象徴される自分の状況を受け入れることが出来ず、自分を正当な人間として捕らえられず、その逆の豊かさを得ることで、失われた自らの中の人間性が獲得出来ると考えていたと思える。これと同じ意識構造として、自分の父が誰なのか分からないという事から生じる、自分の中の欠落し、曖昧化された男性性を証明する必要があった。そのためには女性が必要となった訳である。彼のこうした自己を否定し、他者を求める分裂した願望は、彼に Two-Eye John と John Buddy という二つの名前があることや、構造的にも narrative と character の二つの voice を持つように設定してある (Holloway: 1987, 55) ことによっても示されている。



このように彼が *masculinity* を求めていることの裏には、彼の中で二律背反の意識構造を強めて行ったことがある。このことは彼が *Lucy* に勝りたいという意志を持ちながら *Lucy* の持つ聖女性を求める一方で、彼女とは正反対の女性を演じる *Hattie* やその他の女性、いわゆる *whore* を求めていることに象徴されている。また、彼は説教師という地位を獲得し、説教師という聖者的役割を民衆や *Lucy* に対して演じながら、他方では民衆の不満をよそに女遊びをし、*Lucy* の苦言にも拘わらず、悪人的立場も取ろうとしている。彼の中には、以上のような分裂的傾向が見られるが、その中でも、彼は *Lucy* 的聖女性や説教師的聖人性を求めるという偏った形での分裂をしていることに注目する必要がある。

これは別な表現を使うと、前章で見たように、聖女性や聖人性を求める場合、*whore* や悪人という要素が、彼には必要であったということである。それは *whore* や悪人の持つ否定的含みが聖女や聖人という肯定的要素を増幅する役を演じ得るからである。ところが、こういう聖人(女)性を求めることは、彼の中でも *masculinity* を求める志向と折り合いがつかないのである。何故かと言うと、聖女性にしても、聖人性にしても、基本的に性を否定する概念によって成り立っていて、彼がそれを追及すればする程、彼の *masculinity* を証明出来なくなるからである。そのため、一方では聖女(人)性を求めつつ、*masculinity* を求める為に *whore* や悪人的方向にも向かわざるを得なくなる。すると、彼が求めている、聖(女)人性と彼の距離が離れて行くことになる。こういう事の繰り返しの中で、彼の中の分裂は一層強まって行くのである。即ち、彼の中ではこういう形で二律背反性が高まっていくのである。

このような二律背反の中にある *John* を描く *Hurston* の狙いは、アメリカ黒人の中に歴史的に内在している二律背反性を検証することにあると思える。黒人教会に関する考察で見たように、元来黒人教会の説教師は、民衆と一致したところで捕らえられていて、民衆と遊離した形での聖者性の枠組みは存在しなかった。人種差別という人種の枠組みで人間を規定して来たのと同じ発想で、それがキリスト教の中で、説教師に聖者という枠組みを設定していくことになった。そういう状況の中で、説教師としての役割を演じる *John* は、キリスト教的傾向と、伝来の黒人の土着宗教的傾向を併せ持った存在となっているのである。しかも、上記したようなプロセスで説教師という地位を通して、二つの相反する傾向が相互に作用しあっている中で、強者である、白人側、即ち、キリスト教側に偏った傾向を強める形での分裂が生じているのである。

アメリカの社会は歴史的に、全般的に、二律背反の歴史であったと言っても過言ではない。人種の面での白人対黒人の関係に見られるように多数派対少数派の二律背反はもとより、文明対自然とか集団対個人、所属対解放といった背反する考え方が、絶えず責めぎあう中で歴史を刻んで来たといえる。これは、典型的アメリカ的傾向であると考え、*John* の中にある二

律背反は極めてアメリカ的傾向ということになる訳である。彼はアメリカ的傾斜の中で二律背反の傾向を実践しているとも言えるのだ。

## 5 人種的プライド

*Jonah's* の作品全体の基調は、逃亡のイメージである。John が義父から逃れることに始まり、Lucy の兄の Bud との喧嘩で Alabama から Florida に逃げる事、娘の Isis が病気の時売春婦の Hattie の所に逃げる事、最後に再婚した Sally Lovelace を裏切って売春婦の Ora と不義を行い、彼女から逃げる事など、John はいつも何かから逃亡していたと言っただけが良い。

逃亡のイメージと「ヨナ書」とは関係がある。「ヨナ書」について宮田は、「...ヨナの物語の作者は、むしろ主人公の極めて疑わしい人間性を問題にしているように見える。ヨナの人間的弱み、人間的な振る舞い方、人間的な不安といったものにたいして関心をもっているように思われる」(25)と言っている。宮田の言う「人間的弱み」は、John の Eatonville に向かう動機になって表れている。既述した彼の物質的志向は、別の言い方をすれば、自分に外見のないもの、即ち、西洋的、白人的なものへの憧れが彼を Eatonville に向かわせたのである。神の命に背いた行動をとったヨナと同じように、彼も向かうべきでない方向に向かったのである。John に誤った方向性があったことは、彼が周辺の人によって戒められている事で確認出来る。まず、母は、彼の逃亡癖を論じて次のように言う。

“Dat’s how come Ah worries ’bout yuh. Youse always uh runnin’ and uh rippin’ and clambin’ trees and rocks and jumpin’, flingin’ rocks in creeks and sich like. John, promise me yuh goin’ quit dat.” (28)

Amy には John が物事に直面せず、逃げてばかりいる傾向があることが分かっている、それを注意しているのである。

Alf も tie-camp から Lucy に会いに一時的に帰って来た John に対して “Stop running away. Face things out.” (113) と物事との対峙を促している。また Lucy は固定観念に囚われず本質を直視するようにと助言する。

“You preach uh sermon on yo’self, and you call tuh they remembrance some uh de good things you done, so they kin put it long side de other and when you lookin’ at

two things at de same time neither one of 'em don't look so big, but don't tell uh lie, John. If youse guilty you don't need tuh git up dere and put yo' own name on de sign post uh scorn, but don't say you didn't do it neither. Whut you say, let it be de truth. Dat what comes from de heart will sho reach de heart agin.” (196)

John が行おうとする説教に関して、嘘で自分を偽らず、本当の自分で説教をするようにと言っているのである。即ち、単に教会の人々の持つ固定観念であった、説教師は聖人だというステレオタイプに囚われた説教をするのではなく、自分らしい説教をするように助言しているのである。このように彼の周囲の、彼に好意的な人達は、彼がヨナのように逃げ回り、直面すべきものの本質から逃げていると見ているのである。

この逃亡のイメージと Hurston の父に関わる伝記的面とは関係がある。彼女の父は *Jonah's* の John とほぼ同じ人物で、Hurston とともに決して良い関係ではなかった。だから、彼女にとって父という過去の一つは立ち返りたくない存在なのだった。Howard は *Jonah's* の中に Hurston と父との関係を読み取り次のように言う。

With so many autobiographical references, then, perhaps the story of *Jonah's Gourd Vine* did not merely “tell itself” to its author. Perhaps it was, in addition to being good material for fiction, a real, though subconscious, therapeutic effort to rid herself of her ambivalent feelings toward her father. (Howard, 90)

彼女の父は黒人の女や子供は defiance も imagination も ambition も、白人ではないのだから要らないと考えていて、彼女の心の渇きを否定して来た。こういう父に反感を持ち続けて来た Hurston も、実は父も犠牲者の一人だったのでないかという考え方が出来るようになったのである。(Hurston: 1942, 180-181) そうすることで、彼女は今まで逃げ続けていた父との和解が出来、過去に向ける眼から曇りを取り除いて、過去に向けて回帰出来るきっかけを造ることが出来るようになるのである<sup>7)</sup>。

Hurston は最初は Eatonville を離れたいという強い願望を持っていた。1924年に *Oppportunity* に掲載された “Drenched in Light” には Hurston を思わせる Isis という少女が登場して Eatonville を離れて遠くへ行きたいといつも思っている状況が描かれている。Hurston 自身についても *Dust* の中で Eatonville を出て羽ばたきたかった彼女の思いが書かれてある。彼女のこの思いは、1904年母が死亡し、兄たちのいた Jacksonville に行く事で実行されるが、実質的には1910年 travelling Opera company の Gilbert and Sullivan Troupe の Miss M に

週10ドルでいわゆる女中として雇われた時に達成される。旅劇団と一緒に各地を廻りながら約18カ月過ごす間に北部に行きたいという彼女の願いは適えられる。旅劇団後の数年の伝記的事柄は確かでないが、1917年に Baltimore の Morgan Academy に入った後、Morgan College に入学し、1918年 Howard 大学の preparatory division に入り、1919年の秋に大学に入っている。その後は1923年まで断続的に在籍を続け、1924年の前半に Washington, DC より念願の Harlem に移動している。そして1925年には Harlem に定住を開始し、他の黒人作家たちや白人作家たちとの親交も深めて行く。

以上見て来たように Hurston も他の黒人たちと同じように、北部的志向をもっていたのである。黒人たちが歴史的に北部を「約束の地」として捕らえ、北部移動を繰り返して来たことや、既述した1910年代に始まる the Great Migration の中で、Hurston も例外ではなかったという事である。

その当時の北部での黒人文学の傾向は、Richard Wright などを中心とする抗議文学が主流の時代であった。即ち、“... from what I had read and heard, Negroes were supposed to write about the Race Problem.” (Hurston: 1942, 206) と Hurston が言っているように、人種差別を扱う作品を書くことを要求される時代であった。しかし、抗議文学の根底にある黒人のおかれている状況を悲劇的に見る考え方に Hurston は同調出来なかった。黒人に悲劇性を付与して考えることは、黒人が白人的になれないことに根拠をおいた考え方であるからだ。こういう白人的考え方を軸とする黒人の捕らえ方に Hurston は反発を感じていたのだ。このため、既に見て来た Harlem Renaissance に内在する白人的視点で展開された文学運動にも彼女は与ることが出来なかったのである。この意味で、彼女は同時代人に対し挑戦的だったと言える (Neal, 25)。

彼女のこういった考え方は、北部的志向から離れ、南部的志向となって表面化する。この方向性は彼女が北部で会おう Aline Locke や Charles Johnson, Franz Boas という人達によって促進される。Aline Locke とは Howard 大学で彼女は会う。彼は Howard で Stylus という文学会を主宰していて、そこから文芸雑誌の Stylus を出版していた。Hurston はその文学会会員として受け入れられ、1921年5月に “John Redding Goes to Sea” という初の短編を掲載している。彼は DuBois の “Talented Tenth” のメンバーであったが、DuBois の「政治的」(Witcover, 59)傾向とは方向を異にして、“the richness of blacks’ heritage” (Witcover, 59) を表現することを主張した。しかし、Hurston は Locke たちの中にも “cultural conservatism” (Witcover, 59) があると考えていた。それは、彼らが書いたものが、白人による黒人のステレオタイプと同じものになることを恐れるが為に、“art rooted in the life actually lived by ordinarily black people” (Witcover, 59) を描くことを避け、芸術の為の芸術と

いう傾向を示していたからだ。そのため、後に Locke から Hurston は離れることになるが、黒人文化の芸術性に彼女が目覚めることに彼は大いに貢献したと言える。Charles Johnson は Hurston の 2 作目の “Drenched in Light” を *Opportunity* に掲載した人で、“the New Negro philosophy” (Howard, 54) を推し進めた人である。彼のこの考え方は、黒人芸術を一部の才能があるとされる黒人に限定せず、黒人は等しく豊かな人間性をもっているとして、黒人大衆の生活文化を黒人文学の中に描くことを主張した人で、Hurston に強い影響力を与えた一人である。Franz Boas は Hurston が 1925 年より入学した Barnard 大学で文化人類学の教鞭を取っていたが、彼女に文化人類学の眼を開かせ、黒人の大衆文化の意義を認識させた人と言っていい。当時は黒人文化への興味が広がる中でも、黒人文化の primitive な要素への興味が中心であった。白人文化と比べて primitive な為に研究対象にされるという、人種的歪みをもった視点で cultural anthropology が実践される傾向の中で、Boas は偏った文化の捕らえ方でなく、対等に文化を扱うべきだという姿勢を教えたと言われる。黒人文化の意義を一部の才能があるとされる黒人だけによる文化ではなく、大衆の生活に根差したのみに見いだすべきであると北部で学んで行く Hurston は、それを実感し、実践すべく、1927年に、Boas の推薦を受けて獲得した奨学金を持って、南部に旅立って行く。このようにして彼女は南部に戻って来たのである。

1927年以来南部を中心に民衆の間に入って活動して Hurston が出会えたことは、アメリカ黒人の生活にアフリカの文化が受け継がれているということであった。奴隷としてアフリカよりアメリカに強制的に連れて来られた彼女の先祖たちは、アフリカ性から完全に断ち切られた状態で生活を営むことを強いられたにも拘わらず、心の中でアフリカ性を保持し続けていたのである。

It was said, “He will serve us better if we bring him from Africa naked and thingless.” So the bukra [white people] reasoned. They tore away his clothes that Cuffy [Negro] might bring nothing away, but Cuffy seized his drum and hid it in his skin under the skull bones. The shin-bones he bore openly, for he thought, “Who shall rob me of shin-bones when they see no drum?” So he laughed with cunning and said, “I, who am borne away to become an orphan, carry my parents with me. For *Rhythm* [sic] is she not my mother and Drama is her man?” So he groaned aloud in the ships and hid his drum and laughed. (59-60)

*Jonah's* では黒人大衆の生活の中に受け継がれたアフリカ性が色濃く反映されている。その

幾つかを見て行くことでアフリカの雰囲気を確認していく。

Alf Pearson の農場に奴隷時代より住んでいる Aunt Pheemy という老婆は黒人たちの間で昔から受け継がれている産婆の技術を身につけている。彼女は農場にまだ Amy が住んでいた頃、彼女の子供の John が生まれたとき、産後の世話をし、Lucy が John との子供を産む時も、彼女が安まるような儀式的なことを行う。それは after-birth を家の東側にある木の下に深く掘って埋めたり、臍の緒をうまく処理したりすることであった。決して科学的ではないが、民衆の知恵として代々生活の中に受け継がれ来ていることが、実践されている例である。

安らぎを与えるという点では、死を迎えるものに対する周りのものたちの取る行動もアフリカより伝わった一種の儀式として行われる。Lucy が死を迎える時、近所の人々が集まって、幾つかの儀式を行う。例えば、鏡を布で覆う。それは死者の魂が鏡に取り付いて離れなくなることを避ける為だ (Holloway: 1987, 99) ということである。更に、時計に覆いをかけたり、死者の枕を外したり、死者の顔を東側に向けたりすることもアフリカより伝わった、死者に安らぎを与える為の儀式なのである。また、Boudreaux によると、Lucy が死を迎えようとしている時、John が家の中に入ろうとせず、先祖の霊のある木の下に行き Lucy の死を待つ行動もアフリカ的な信心で、悪霊から身を守る為の方法だということだ (Boudreaux, 55)。

voodoo 教とその呪術師もアフリカの雰囲気伝えてる。具体的に呪術師としては Dangle と War Pete という二人が登場する。Hattie が John を何とか自分のものにしたいと狙っていた時、Lucy が邪魔になって、彼女に voodoo の呪いをかけて死亡させたと言わせる描写がしてあるし、Lucy の死後 Hattie の悪行に気付いた John が Hattie に冷たくあたることに仕返しをしようとする時、彼に呪いをかけようとしていることも描かれている。呪術師は Hattie に “Stan’ over de gate whar he sleeps and eat dese beans and drop de hulls ’round yo’ feet” (200) と呪いのかけ方を教える。John の方は逆に呪いの解き方を教えられ、実践する。

“.... Dat damn ’oman you got b’lieves in all kinds uh roots and conjure. She been feedin’ you outa her body fuh years. Go home now whilst she’s off syndicatin’ wid her gang—and rip open de mattress on yo’ bed, de pillow ticks, de bolsters, dig ’round de door-steps in front de gate and look and see ain’t some uh yo’ draws and shirt-tails got pieces cut offa ’em ....” (251)

John 自身は呪術師ではなく、説教師として、voodoo 教に関わる人物として描かれてある。彼に民衆を恍惚とさせる能力があることは、voodoo 教の呪術師の力が彼にあることを示して

いる所であり、そのことは彼の名前の一つが Two-Eye John というだけでも裏付けられる (Boudreaux, 53)。彼にアフリカ性があったことは、彼の説教の内容や “ha!” と息継ぎをしなからする説教の仕方, shouting で感情的に高まりを示す方法 (Hurston: 1981, 91), 会衆がそれによって手をたたいたり, 足を踏み鳴らしたりして応える所などによって示されている。

Hurston は南部の旅の中で実際に voodoo 教の儀式を経験していて, *Mules and Men* や *Tell My Horse* でそのときの体験を説明している。Luke Turner という昔から伝わる voodoo 教の儀式に詳しい人に習っている (Hurston: 1935, 198)。voodoo 教は, 現代の宗教からすると野蛮で時代遅れの宗教と捕らえられがちだが, 体験の中で voodoo 教が黒人の生活の中に日々生きていることを認識し, キリスト教ではなくアフリカより伝来の宗教に黒人の基盤があることを確認しているのである。だから Hurston は, “Hoodoo doctors of the American South practice a religion every bit as strict and formal as that of Catholic church” (Hurston: 1981, 83) と正当性を主張出来るのである。

Hurston がアフリカ性に支えられたアメリカ黒人の生活を描くことの狙いは, “the ethnicity that unifies his spirit to the non-Western world” (Holloway: 1992, 69) を主張することにある。当時黒人文学の主流だった社会リアリズムの視点からすると, 今まで見て来たようなアフリカ性に則った黒人の生活は, 前近代的で野蛮な文化と映るかも知れないが, それが黒人そのものであり, 決して黒人を degrade させるものとはならないのである (Gates, 211)。だから, 黒人性が *Jonah's* という作品の一種の障害になっているとか, 黒人はやはり無能だというイメージを読者に持たせる可能性がある (Ford: 1986, 242) という読み方は Hurston の狙いを読み誤っているものと言わねばならない。

Ford のような読み方は, 元来, 白人が白人対黒人という二律背反の意識構造に基づく人種差別の中で, 白人より劣った文化をもつ黒人として, 画一的に否定して来たことと同じことを実践するものなのである。作品の中で, 例えば, voodoo 教によって黒人が画一的に野蛮な文化をもった劣等な存在として蔑視され, 差別を受けて来たという認識に通じることを John が述べている。

“And dat’s how come Ah didn’t have ’em tuh call yuh. Ah didn’t want de white folks tuh hear ’bout nothin’ lak dat. Dey knows too much ’bout us as it is, but dey some things dey ain’t tuh know. Dey’s some strings on our harp fuh us tuh play on and sing all tuh ourselves. Dey thinks wese all ignorant as it is, and dey thinks wese all alike, and dat dey knows us inside and out, but you know better. Dey wouldn’t make no great ’miration if you had uh tole ’em Hattie had all dem mens. Dey

wouldn't zarn 'tween uh woman lak Hattie and one lak Lucy, uh yo' wife befo' she died. (261-262)

John の態度はやや消極的で不満が残るが、読者は黒人が白人との文化的対比によって、白人の価値基準で判断され、否定されて来たという方向性をもって読む必要がある。何故なら、voodoo 教に限らず、その他にも黒人は勤勉かどうかとか従順かどうかといった白人を中心とした基準で絶えず判断されていたからである。

こう言った白人的基準を捨て、人種的プライドを回復するために「説教師」としての John を描くことが Hurston には是が非でも必要だったのである。作品中 John は黒人の人種的プライドを示せるだけの十分な才能を持っている人物だからである。彼が示す tie-camp で行う説教をまねた話が人々を充分楽しませることに始まり、本格的に説教師を始めた後も、絶えず会衆が“shout”出来る、即ち、彼と会衆がインスピレーションを共有する (Eley, 321) 説教をすることが出来ることも、“living metaphor”として“visionary cries”になり得る sermon を行っていることも (Hemenway, 197) 総て John の説教師としての有能さを示しているのである。

Hurston の中には黒人は白人が規定する程無能ではない (Hurston: 1990, 21-23) というプライドがあるのである。彼女は John によって示される説教師としての能力が、黒人の人間としての能力なのだという、人種的自負を James Weldon Johnson への手紙の中で述べている。

I suppose that you have seen the criticism of my book in the *New York Times*. He means well, I guess, but I never saw such a lack of information about us. It just seems that he is unwilling to believe that a Negro preacher could have so much poetry in him. When you and I (who seem to be the only ones even among Negroes who recognize the barbaric poetry in their sermons) know that there are hundreds of preachers who are equalling that sermon weekly. He does not know that merely being a good man is not enough to hold a Negro preacher in an important charge. He must be an artist. He must be both a poet and an actor of a very high order, and then he must have the voice and figure. He does not realize or is unwilling to admit that the light that shone from GOD'S TROMBONES was handed to you, as was the sermon to me in *Jonah's Gourd Vine*. (Hurston: Letter to J.W.Johnson, 1934)

この手紙から、彼女の狙いが黒人説教師によって黒人の人間性を表すことにあった事が分かる



し、黒人の中にはごくありふれた形で説教師的の面が存在していて、そのことで、黒人全般に決して人種差別で規定されるような劣った人間性がある訳ではないことを示そうとしていると言える。このため、John を “too smooth a talker” (Dove, x) と言って否定的見解を示す Dove の読みも Hurston の狙いを読み誤るものである。“too smooth a talker” であることがむしろ必要であるからだ。

このようにアフリカの identity に支えられたアメリカ黒人の identity を正当な人間性を表す為の根拠として主張する Hurston の狙いは、このことを崩壊寸前の西洋的世界の中で、混沌とする社会で苦悩する人々の精神の神秘的癒しを行う原動力として復活させることにあるようにも思える (Boudreaux, 56)。

## 6 分裂の克服を目指して：John の認識

白人的基準の中で否定されて来た黒人性をプライドをもって回復することは黒人たちにとって必要な事である。しかし、その人種的プライドには危険性も同時にあることを忘れてはいけない。過度に人種的プライドを持ち、他方を否定することで、そのプライドを維持しようすると、彼らが差別されて来たのと同じ意識構造になるからである。*Jonah's* で注目すべき点はこの点でもある。

*Jonah's* の世界では主な白人は Alabama の Alf Pearson だけで、他に白人は殆ど登場しない。Alf は脇役として描かれるが、John との関係は深い。恐らく彼の父だろうと思われる Alf は、義父の Ned と母の Amy の下を離れてやって来た John を暖かく迎えてくれて、彼を学校にやったり、責任ある仕事をやらせたり、助言をしたり、色々問題を John が起こしても彼を擁護する側に廻ったりしてくれる。こういった彼も “the Black militancy of the 1950s and 60s” (Eley, 320) からすると弾劾されるべき立場にあったはずだ。奴隷制時代、いくら奴隷の扱いが温情的だったにしても、奴隷制度を支えてきたそしりは免れ得ないからである。しかし、Alf が John の父である可能性を作品の中で深めないことや、Alf を、他の人と変わらない、普通の John に好意的な一人の男として描いても、彼を弾劾することはしないことなどから、作品を人種問題を扱うものにする意図が Hurston にはなかったことが分かる。むしろ彼女の狙いは、黒人の内面的方向にあったと言える。それは既述した人種的プライドを引き出すアフリカ性が、必ずしも、絶対的に肯定的な力をいつも持っているという書き方がされていないことから分かる。例えば、Lucy が死亡するとき、死者を迎える儀式を拒否したい彼女は、娘の Isis に死の直前それを頼んでおく。しかし、近所の人々は二人の願いを、伝統と習慣の力の下に無視してしまう。作品の狙いが黒人の内面性にあることは Cozy という John の

代わりの説教師を見れば一層明確になる。彼の説教では黒人の歴史的に重要な役割が述べられるだけで、白人より勝っているということを説明することに終始している。例えば、彼の人種的誇りを示す説教は Caesar の隣にいて彼を助けたのは黒人だったとか、Jesus は黒人だったのだとか、Adam も塵から造られたのだから当然黒人だといったものなのである。別の所では、voodoo 教の間違った使い方を描いているところである。本来 voodoo 教は黒人たちの心を日々の生活の中で支えるために存在したはずだが、Hattie たちのように相手を陥れる為という、いわゆる弱肉強食的論理の実践の為に使うと、もはや本来の「voodoo 教」の役割である、人種的プライドを回復する糸口とはなり得ないのである。むしろ、既述した分裂を強化することになり、白人か黒人といった二律背反性が高まることになるのである。

このように見て来ると主人公 John に課せられていた事は、この二律背反といかに対峙するかという事であると言える。既に見て来たように、John の中でも社会の中にも、白人側に偏った形での分裂が見られた。しかし、その分裂傾向の中には、一方を否定することで他方を肯定するという二律背反性によって一層の分裂を造り出していた。こういう分裂を造り出す前提として、ある事柄に対して、外見的に判断してそれで固定的にその判断を定着させてしまう傾向があることに眼を向ける必要がある。例えば、人種差別で言えば、黒人というものを外見的に黒いが故に人間的に価値がないとして固定的に一括して判断してしまうという論法である。そういうことが基盤になって、黒人否定と白人肯定という二律背反が生じるのである。こういう意識構造があるため、説教師という身分に対しても、一定の固定観念で判断してしまう傾向が生じる。町の人々が「説教師」という外見的 status を大事にしている、John という内面的人間性を見ていなかったということを、裁判後に John は知って来る。

The toadies were there. Armed with hammers. Ever eager to break the feet of fallen idols. Contemptuous that even the feet of idols should fall among them. (256-257)

toadies とは会衆や、Hattie とのことであり、裁判で反 John の立場を取っている人達のことである。fallen idols とは John のことを暗示している。彼らは John 自身でなく、説教師という身分を尊敬していたということをおもうとしている。彼らの中に理想的説教師像という固定観念があり、それに沿うものは尊敬するが、沿わないものは否定するのである。会衆だけでなく John も自分自身を説教師という外見的 status で判断してしまう傾向があったことに気付いていく。

He was going about learning old truths for himself as all men must, and the knowledge he got burnt his insides like acid. All his years as pastor at Zion Hope he had felt borne up on a silken coverlet of friendship, but the trial had shown him that he reclined upon a board, thinly disguised. (267)

John のこの新たな自己認識は作品を評価する上で重要なポイントとなる。John に自己認識が出来たかどうか、*Jonah's* の評価の対象として議論されているからである。多くの批評家は John の自己認識がなかったという読み方をしている<sup>8)</sup>。しかし、上記引用は John が自分の中に外見的な説教師という身分で自分の事を判断していたことに気付いたと読める。それに加えて、こういう判断が出来るようになったが故に、彼は Eatonville にやって来たのとは全く異なる動機で Plant City に行くことが出来る。彼の中にはかつての物質的志向もなく、神の命に従うかのように、“haphazard” (288) にその町に向かう。これはかつての物質的豊かさを求めるヨナのイメージの John と比べると大きな違いなのである。

彼のこういう認識を肯定し普遍化させる為に Hurston は構造的工夫をしている (Holloway: 1987, 71-73)。即ち、narrator と主人公の John を、John の認識に伴って融合させて行くという方法を取っている。最初、narrator は全知の第三者として作品を引っ張り、John は主人公として周りの人々との対話によって作品を引っ張ってきた。それが彼の内的発展と共に narrative と John が重なって来て、John が narrate している形になる。こうすることで、narrator の持っていた全知の力が John の発言に付加され、彼の認識が普遍的意義を帯びて来るのである。

## 7 おわりに：“Dat’s de brute-beast in me”

“Yes suh, but who kin tell de truth and swear dat he know uh man ain’t nothin’ lak dat?” (260)

“Damned, if I kin see how it happened,” the engineer declared. “He musta been sleep or drunk. God knows I blowed for him when I saw him entering on the track. He wasn’t drunk. Couldn’t smell no likker on him, so he musta been asleep. Hell, now I’m on the carpet for carelessness, but I got witnesses I blowed.” (309)

最初の引用は、John が裁判所で証人を求めなかった時、自分が証人であり他の誰も証人には

なり得ないと言っているところである。次の引用は、彼が最後にぶち当たった汽車の機関士の発言で、彼が自殺したらしいと匂わせているところである。この二つの引用は最後の John の中に存在する “brute-beast” を考える際役に立つ。

前章で見たように裁判を通して、John が一定の認識に到達したにも拘わらず、その後彼がまた今までと同じ女遊びを繰り返すところは解釈の難しいところである。Holloway は John の死は魂の面でアフリカ性を守れなかったことを示す (Holloway: 1987, 93) という主旨のことをいっている。しかし、「ヨナ書」のヨナの持つ人間的弱さに関わらせて John の死は考えるべきものと思う。

John の最大の欠点は、周囲への批判的視点はあっても、自己に対する眼が弱いというところであった。物事を自分の責任として受け止める面、自分が行った結果生じたという自分の行動責任に対する葛藤は彼には欠けている面である。例えば、Zion Hope の人々に対しても、John は自分の至らなさで葛藤することは殆ど無い。Ora との関係でも、narrator に “mad at his weakness” (307) と言わせているが、context としては、彼は Ora に攻撃的である。このように全般に彼は自分の行動に対して責任を取っていないのである。

ところがヨナの人的弱さで暗示されたように、人間には基本的に “de brute-beast” (144) が住みついているのである。これは具体的には Schmidt の言うような “uncontrollable sexuality” (133) という表現を使うことも可能だろうが、いわゆる、原罪的考え方がベースにあると考えるべきだろう。It is not your enemies that harm you all the time.” (271) という表現がそれを如実に物語っている。本当の敵は自分の中に存在していると言おうとしている。自分の中にある内なる罪に対する責任は、自分以外責任をとる人はいないのである。作品中 John に負わされている役は彼が罪に対する責任をどう取るかではなく、彼を含めた人間は、誰でもこの責任を負っているということを読者に知らしめることである。罪に対する責任の取り方が示されていないために、Hemenway の言うように John の個人の葛藤の方が全体文化 (communal esthetic) より下に扱われている (Hemenway, 198) ように見えるが、その問題を John の手から作品を通して John に接した読者に渡すことで、John という個人の問題が読者の問題として捕らえられることが可能になり、作品の外での広がりを生み出すことになる。こうすることで、作品では下に扱われているように見えた個人の葛藤が、普遍性を帯びて来て、本当は個人の葛藤に焦点があったことが明確になる。更に、構造的にも Yarborough が “The multiple in the third-person voice seems to open a fourth narrating space—the reader’s—who can, is, encouraged to retell the story” (132) というような方法で、読者に還元させることで、個人の葛藤が補足されるようになっているのである。

## Notes

1. その理由について、Hemenway は Van Vechten の *Nigger Heaven* を意識して黒人のキリスト教徒としての有能さを読者に示す為 (Hemenway, 194) と言い、Speisman は父の呼び名が “Big Nigger” だったからと言っている (Speisman, 87)。
2. 詳しいいきさつについては *Dust Tracks on a Road* にある。それを簡単に紹介しておく、この作品は “story about a man” で 1929 年頃思い付いた。完成までに 5 年かかった。この時代は “race problem” を書く圧力がありそれも筆が進まなかった理由のようである。(Hurston: 1942, 214)
3. Glassman によると *Jonah's* の批評は少ないということだ。  
Previously, little critical attention had been paid to this seminal first book. In fact, a comprehensive computer search turned up mention of the book in exactly a dozen articles, only one of which was devoted totally to the novel. (Glassman, xi)  
彼女の批評のコレクションはネィティブとしては少ないようだが、Hurston に関する批評が少ないことは確かである。それに批評も定着していないと言える。
4. Bone (127) や Dove (xiv-xv), Baker (14), Gates (213) が言語的面で評価を与えている人達である。ここでは、否定的評価の部分を含めて、Bone の説明を紹介する。  
*Jonah's Gourd Vine* has style without structure, a rich verbal texture without dramatic form, “atmosphere” without real characterization. It is the story of John Buddy, a field hand turned preacher whose congregation accepts him as “a man amongst men,” but is unprepared to find him also a man amongst women. A great preacher (the author introduces a ten-page sermon to prove it), John Buddy is no less a lover. An erratic tension arises between folk artist and philanderer, but it is not carried forward to a suitable denouncement. In its emphasis on atmosphere and local color, in its exploitation of the exotic, and especially of *exotic language*, and in its occasional hint of primitivism, *Jonah's Gourd Vine* expresses a sensibility molded predominantly by the Negro Renaissance. [my emphases] (Bone, 127)
5. *Their Eyes* の中でも Janie の祖母の Nanny は Logan Killicks という老年の土地持ちを孫娘の結婚相手として強く薦める。物事がよく分からなかった Janie は祖母の助言通り Logan と結婚するが、二人の関係はやがて崩壊する。この時の祖母の気持ちは Emmeline と同じように、土地されれば Janie が安定した生活が出来るだろうということであった。
6. Howard (84-85) を参考に、蛇と考えられるものを整理してみると次のようになる。  
a. 蛇自体——支流にいる cotton-mouth moccasin. John は Lucy の為それを殺す。Amy は John に Songahatchee 川には蛇がいるので注意するようと言う。  
b. 鞭——Ned が Amy を殴るとき使う。  
c. 汽車——John は汽車に魅了させられる。Lucy の兄がくれた song book の裏カバーにも汽車の絵がある。John が Notasulga を出るとき初めて汽車に乗る。彼は sermon の中で汽車を metaphor として使う。最後は、汽車が彼を殺す。  
作品では蛇のイメージが徐々に鮮明になって行くように描かれてある。
7. Howard も *Jonah's* を Hurston が父と和解しようとする意図を持って描いた面もある作品として読んで、 “It is in *Jonah's Gourd Vine*, then, that the conflict between father and daughter is finally resolved” (91) と言っている。
8. 多くの批評家が John は自己認識を達成していないという読み方をしている。McDowell は “... he is not having learned one of the universal truths of the human condition ...” (153-154) と言い、John は世の中が二律背反で成り立っている現実を認識し得ずに死んだと言っている。Holloway は

John は死によって救済されるが、自己認識はしていないと言う。(“... John will never come to the point of awareness on his own; death is his soul's only salvation.”: 1987, 66) Brown は自然と人間との関係で自然と協調して生きるか征服して生きるかというテーマとの関係で、John を見ていて、永遠のテーマであるからこそ試行錯誤が描かれていると言う。即ち、“John Pearson's inability to resolve the conflict...” (85) と捕らえているのである。Howard は John の死という悲劇性でアフリカの文化とキリスト教的文化の調和の困難性を示しているが、John 自身はその“cultural dilemma” (76) に気付かずに死んで行くと言う。フェミニズム的視点で Hurston を読む Schmidt も John の最後の死は黒人女の抑圧者として自己認識の欠如の結果だ (111) として否定的見解を述べている。Bone も John がアフリカの文化の下で潰されてしまうというイメージが強いとして、「...その緊張は、適切な解決に至らぬまま終わってしまう」(127) と言っている。その他、Witcover も自分自身の本質に理解の眼が向かないために John の死があった (87) としているし、Hemenway も文化的違いの中で John は自滅していく (200) と否定的である。

### Works Cited

- Baker, Jr., Houston A. *Long Black Song: Essays in Black American Literature and Culture*, The Univ. Press of Virginia, 1972. Rpt., 1990.
- Bass, George Houston and Henry Louis Gates, Jr., eds. *Langston Hughes and Zora Neale Hurston, Mule Bone: A Comedy of Negro Life*, Harper Perennial, 1991.
- Bone, Robert. *The Negro Novel in America*, Yale Univ. Press, 1958. Revised in 1965. Rpt., 1970.
- Boudreaux, Joan S. “Identification of African Ritual in *Jonah's Gourd Vine*” in *All About Zora: Views and Reviews by Colleagues and Scholars* ed. by Alice Morgan Grant. FOUR-G Publishers, Inc., 1991.
- Brawley, Benjamin. “One of the New Realists” in *Zora Neale Hurston (Modern Critical Views)* ed. by Harold Bloom. Chelsea House Publishers, 1986.
- Brown, Alan. “‘De Beast’ Within: The Role of Nature in *Jonah's Gourd Vine*” in *Zora in Florida* eds. by Steve Glassman and Kathryn Lee Seidel, Univ. of Central Florida Press, 1991.
- Dove, Rita. “Foreword” in *Jonah's Gourd Vine*, 1934. Rpt. by Harper Perennial, 1991.
- DuBois, W.E.B. *The Souls of Black Folk*, 1903. Rpt. in *Three Negro Classics* ed. by John Hope Franklin, Discus Edition, Sixth Printing, 1969.
- Eley, Holly. “Afterword” in *Jonah's Gourd Vine* by Zora Neale Hurston, 1934. Rpt. in *Virago Modern Classics*, 1987.
- Ford, Nick Aaron. *The Contemporary Negro Novel*, 1936. Rpt. in *A Library of Literary Criticism: Modern Black Writers* ed. by Michael Popkin, Frederick Ungar Publishing Co., 1978.
- . “A Study in Race Relations—A Meeting with *Zora Neale Hurston*” in *Zora Neale Hurston (Modern Critical Views)*.
- Gates, Jr., Henry Louis. “Afterword, Zora Neale Hurston: ‘A Negro Way of Saying’” in *Jonah's Gourd Vine*. Rpt. by Harper Perennial, 1991.
- Gayle, Jr., Addison. “The Outsider” in *Zora Neale Hurston (Modern Critical Views)*.
- Glassman, Steve and Kathryn Lee Seidel. “Introduction” in *Zora in Florida*.
- Hemenway, Robert E. *Zora Neale Hurston: A Literary Biography*, Univ. of Illinois Press, 1977. Rpt., 1980.
- Holloway, Karla F.C. *Moorings and Metaphors: Figures of Culture and Gender in Black Women's Literature*, Rutgers Univ. Press, 1992.

- Holloway, Karla F.C. *The Character of the Word: The Texts of Zora Neale Hurston*, Greenwood Press, 1987.
- Howard, Lillie P. *Zora Neale Hurston*, G.K.Hall and Co., 1980.
- Hurston, Zora Neale. "Drenched in Light," 1924. Rpt. in *Spunk* as "Isis" by Turtle Island Foundation, 1985.
- . "Sweat," 1926. Rpt. in *Spunk*.
- . "Letter to James Weldon Johnson, May 8, 1934," James Weldon Johnson Collection, Yale Univ. Library.
- . *Jonah's Gourd Vine*, 1934. Rpt. by Virago Press, 1987.
- . *Mules and Men*, 1935. Rpt. by Harper & Row, Publishers, 1990.
- . *Tell My Horse*, 1938. Rpt. by Harper & Row, Publishers, 1990.
- . *Dust Tracks on a Road*, 1942. Rpt. by Univ. of Illinois Press, 1984.
- . *The Sanctified Church: The Folklore Writings of Zora Neale Hurston*. Rpt. by Turtle Island Foundation, 1981.
- . "Art and Such" in *Reading Black, Reading Feminist, A Critical Anthology* ed. by Henry Louis Gates, Jr., A Meridian Book, 1990.
- Love, Theresa R. "Zora Neale Hurston's America" in *Zora Neale Hurston (Modern Critical Views)*.
- McDowell, Deborah Edith. "Women on Women: The Black Woman Writer of the Harlem Renaissance." Dissertation submitted to Prudue Univ., 1979. Rpt. by Univ. Microfilms International, 1988.
- Miyata, Mitsuo (宮田光雄). 『キリスト教と笑い』岩波書店, 1992.
- Morris, Ann R. and Margaret M. Dunn. "Flora and Fauna in Hurston's Florida Novels" in *Zora in Florida*.
- Neal, Larry. "The Spirituality of *Jonah's Gourd Vine* in *Zora Neale Hurston (Modern Critical Views)*." Saruya, Kaname (猿谷要). 『アメリカ黒人解放史』サイマル出版会, 1968. 普及版, 1971.
- Schmidt, Rita Terezinha. "'With My Sword in My Hands': The Politics of Race and Sex in the Fiction of Zora Neale Hurston." Dissertation submitted to the Univ. of Pittsburgh, 1982. Rpt. by Univ. Microfilms International, 1986.
- Speisman, Barbara. "Voodoo as Symbol in *Jonah's Gourd Vine*" in *Zora in Florida*.
- Wall, Cheryl A. "Introduction: Taking Positions and Changing Words" in *Changing Our Own Words* ed. by Cheryl A. Wall, Rutgers Univ. Press, 1989.
- Washington, Booker T. *Up from Slavery*, 1900, Rpt. in *Three Negro Classics*.
- Witcover, Paul. *Zora Neale Hurston (Black Americans of Achievement)*, Chelsea House Publishers, 1991.
- Yarborough, Richard. "The First-Person in Afro-American Fiction" in *Afro-American Literary Study in the 1990s* eds. by Houston A. Baker, Jr. and Patricia Redmond, The Univ. of Chicago Press, 1989.